第７課　神に対する正直さ

【暗唱聖句】

「良い土地に落ちたのは、立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」ルカ8:15

【今週のテーマ】

【日曜日・単純な正直さの問題】

クリスチャンには単純な正直さが求められます。しかし、わたしたちの中には不正直な面があるかもしれません。そしてそれを合理化、正当化してしまうことがあるかもしれません。

「不正直は私たちの群れのどこにおいても行われており、これが真理を信じていると公言する多くの人が生ぬるい原因なのである。彼らはキリストにつながっておらず、自分自身の魂を欺いている」（E・G・W　教会への証）

不正直はわたしたちの信仰の生ぬるさにつながるとエレン・G・ホワイトは言っています。小さなことにも忠実であるようにと聖書は教えています。そうでなければ神様は神様の働きを任せることができません。また、神様に対する正直さは、什一献金で試されています。

「土地から取れる収穫量の十分の一は、穀物であれ、果実であれ、主のものである。それは聖なるもので主に属す」レビ27:30

収入の十分の一は聖なるものであり、それは主に属するものであると主は語られました。もし、忠実に什一を捧げなければ、それは人や教会ではなく、神様に対して偽ることになります。つまりわたしと神様との関係が崩れてしまうのです。心配はありません。神様がすべてを支えてくださいます。その信仰の証として什一をお返しするのです。

「人は神を偽りうるか。あなたたちはわたしを偽っていながらどのようにあなたを偽っていますか、と言う。それは、十分の一の献げ物と献納物においてである」マラキ3:8

【月曜日・信仰生活】

信仰生活は一度きりのことではありません。一度だけ力強く信仰告白をすれば良いのではありません。アブラハムが息子イサクをモリヤの山に捧げることができたのも、神様を信じる信仰の積み重ねの結果でした。アブラハムとて、何度も失敗しながらも徐々に成長していったのです。

「信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです」ヘブライ12:2

忠実な管理者にとって重要なことは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになった信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめつづけることです。わたしたちに神様を信じる信仰を与えてくださったのはイエス・キリストです。そのキリストはわたしたちの信仰を完成させてくださる方でもあるからです。

【火曜日・信仰の表現】

信仰は成長し成熟する過程であり、動的な経験です。什一は、その信仰が成長・成熟するための動的経験の一つです。什一は救いをお金で得ようとする行為ではありません。什一は信仰の現われです。本当に信仰があるのかを計るものさしです。では、イエス様は什一に対して何かを語っているでしょうか。あまり多くのことを語ってはいないのですが、什一をたとえに持ち出して、大切な真理を語っておられる箇所があります。

「それにしても、あなたたちファリサイ派の人々は不幸だ。薄荷や芸香やあらゆる野菜の十分の一は献げるが、正義の実行と神への愛はおろそかにしているからだ。これこそ行うべきことである。もとより、十分の一の献げ物もおろそかにしてはならないが」ルカ11:42

ファリサイ派の人々が不幸だとイエス様が言われたのは、什一は一生懸命に捧げるのに、正義の実行と神への愛はおろそかにしているからでした。規則に忠実な人が多い日本の教会でも同様に、什一はきちんと捧げるのですが、正義の実行と神への愛はおろそかにしてしまうことがあるように思います。ただ、什一をきちんと捧げる心のある人は、神様への愛と正義を実行したいという思いがあるはずです。神様への愛と正義を生きることができるようにさらに祈り求めていきましょう。また、什一と正義の実行と神への愛を比較した場合、後者のほうが重要なことであるとイエス様は語りつつも、什一をおろそかにしてはならないがと続けていることから、イエス様が什一を否定していこともわかります。

ヤコブはまた、誓願を立てて言った。「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」創世記28：20～22

ヤコブは家を追い出され、不安と孤独の中で荒野をさまよっていると、夢で天の使いがはしごの上を登りするのを見ます。そして「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ」と畏れつつも喜びが沸き上がってきます。すると、ヤコブが神様は神様が与えて下さるものに対して什一を捧げることを誓うのでした。神様から見捨てられてしまったような状況の中で、決して見捨てられたわけではないのだとわかり、ならば神様は自分を支え、養ってくださるに違いないとの信仰が沸き上がり、そして什一を捧げる誓いを立てる。この場面から学ぶのは、什一は神様の恵みによって支えられていることの信仰ゆえの喜びの応答ということではないでしょうか。

【水曜日：正直な什一　主に属する聖なるもの】

「土地から取れる収穫量の十分の一は、穀物であれ、果実であれ、主のものである。それは聖なるもので主に属す」レビ27:30

什一は主のものであり、それゆえに聖なるものです。この2点を正しく理解することが重要です。什一は主のものであるがゆえに、それはわたしたちの献金行為ではなく、主のものをお返しするということになります。また、什一はわたしたちが聖別して捧げるから聖いのではなく、初めから本質的に聖いのです。神様が聖なる方であるように、什一も聖なるものなのです。わたしたちは、その神様が聖としてくださったものの管理者なのです。これはとても畏れ多いことです。

　聖という言葉、神聖な用途のために取り分けるという意味があります。わたしたちは安息日を他の日とは違う日として1週間の中から取り分けているように、什一も神様の聖なる所有物として取り分けることが大切です。それは神様を強く意識する行為であり、神様への愛の現われです。ある人達は、安息日も什一も旧約時代に制定されたものであり、新約聖書には改めて述べられていないゆえにその有効性は認められないと主張します。しかし、神様が聖とされたものは永遠に聖なるものです。その有効性は当然であり、新約聖書で改めて述べるまでもないということです。

【木曜日・リバイバル、改革、什一】

ヒゼキヤやネヘミヤの時代にリバイバルと改革が起こりました。その際にいつも民たちは什一を捧げたことが記録されています。

「ヒゼキヤは二十五歳で王となり、二十九年間エルサレムで王位にあった。彼は、父祖ダビデが行ったように、主の目にかなう正しいことをことごとく行った。」（歴代誌下29:1、2）

紀元前700年頃のユダ王国の王であったヒゼキヤは、「レビ人よ、聞け。今、自分を聖別し、先祖の神、主の神殿を聖別せよ。聖所から汚れを取り去れ」と命じ、改革を断行します。すると、「エルサレムに大きな喜びがあった。イスラエルの王ダビデの子ソロモンの時代以来、このようなことがエルサレムで行われたことはなかった。祭司たちとレビ人は立ち上がって、民を祝福した。その声は聞き届けられ、その祈りは主の聖なる住まい、天にまで達した」（歴代誌下30:26、27）と続きます。そして、「この命令が伝わると、イスラエルの人々は穀物、ぶどう酒、油、蜜など、畑のあらゆる産物の初物を大量にささげ、またあらゆる物の十分の一を大量に運んで来た」（歴代誌下31:5）と続くのです。

「こうしてユダの人々が皆、十分の一の穀物と新しいぶどう酒と油を貯蔵室に持って来た」ネヘミヤ13:12

バビロン捕囚から帰って神殿を再建したネヘミヤのときも、リバイバルと改革が起こり、「こうしてユダの人々が皆、十分の一の穀物と新しいぶどう酒と油を貯蔵室に持って来た」（ネヘミヤ13:12）と記録されています。このように、リバイバルと改革と什一は自然に結びついていることがわかります。霊的な刷新が起こると、神様に対して正しいことをせずにはおれなくなるものです。神様がその人の内で生きて働いていることが、什一を通してわかるのです。